
I ~ 真実の瞳 ~

零居 椎名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I〜真実の瞳〜

【Nコード】

N9288N

【作者名】

零居 椎名

【あらすじ】

中谷仁美（48歳）は、この歳にして夫と離婚。仕事は人員削減のため歳の仁美はリストラ、息子は成人し親元を離れ、自分の両親もすでに亡くなっており、ともに過ごす友人にも恵まれず、一人途方にくれていた。

そんなあるとき、仁美のもとに一通の手紙が届く。それはとある会社「E」の社長、坂久保曜子からのもので、手紙には私の秘書として働きませんか、と記されていた。何もかも失い生きる気力を失いかけていた仁美にとってそれは最後の救いの手となっていた。そし

て仁美は謎の会社「E」で、坂久保の秘書として働き始めることになるが・・・？

貴方の秘書として

それは、とある裏社会のお話。

「I」

死刑を執行され死んだ者や、刑務所で自殺したものなど。いずれかの不幸を持って亡くなった人々の死体からある部分だけを取り出し、研究に使う。その研究の場となっているのが、刑務所の裏にある会社「I」である。そしてある体の一部とは「目」のことで、ここでは目のことに関しての様々な研究を行っている。しかしそれは、一般人の立ち入ることの無い世界であり、一般の人にはほとんど知られていないという。まさに裏社会なのである。

「……………最初は、愛のほうかと思いました」

坂久保の後ろについて歩いている途中、仁美は何気に呟いた。

社長の秘書だからって堅苦しくする必要はないのよ、言いたいことがあればいってしょうだい。そう坂久保に言われたので、遠慮なく発言してみたのだ。

「冗談じゃないわ、ジャンルが違いすぎる」

もっと優しい返事が返ってくるのかと思ったら、期待以下のキツイ言葉が返ってくる。

「……………そ、そうですね！」

正直言って今の状態はかなりきつい。さっきからこんなばかりで、まともに会話も続かなかった。仁美から話しかければすべて会話の最後の言葉で返されてしまったため、すぐに終わってしまうのだ。というよ

り、坂久保はまるで会話を続けたくないようにしか返事を返してくれないのだ。

「此処が社内よ」

仁美が深く考え込んでる間に、Iの本社へと到着した。

「き、綺麗…」

社内は全体が白をベースとした大理石で造られており、壁にはたくさん部屋がると思われるドアが幾つもあり、植物など無駄なものは一切なくキラキラ輝いていた。それどころか、人は1人も見つからない。

「社長、あの。社員さんたちは一体どこにいらっしやっ…?」

「社員は各部屋に数名いるわ。皆此処では研究を行っているからね、静かでしょう」

「確かに…」

「ボーっとしてないで、こっちよ」

坂久保はサクサクと歩いて、一番奥の少し大きな部屋に向かった。胸ポケットから鍵をひとつ取り出し、3つの鍵穴に差し込んでドアを開けた。同じ鍵穴とはいえ結構嚴重である。

「私がいつも居る…ここが社長室」

そこは先ほどの白い空間とは違い、暗めの茶色い木でできた壁や、デスク、テーブル。そして大きな植物が1つ飾られていた。いかにも社長室というかんじだ。それにしてもやたら広い。

デスクの上には何枚も資料と思われる紙が積み重ねられていた。

「それから…」

「なんででしょう?」

坂久保はデスクの引き出しから連なつた3つの鍵を取り出し、仁美に手渡した。

「鍵ですか」

「ええ、その『I』の文字が刻まれているのが此処の部屋の鍵。他

のは後で説明するわ…後、」

「社長」

「？」

仁美は鍵をぎゅっと握り締め、坂久保の目を見て言った。

「本当に…私でよろしいんでしょうか？」

「と、言う」と

「私なんかで、秘書が務まるでしょうか？」

仁美は真剣だった。というより此処に来て、少し怖くなっていたのだ。自分は本当にここで働くのか、いきなりこんなところに連れて来られて不安でいっぱいだった。

坂久保はフツと肩で笑って、にっこりと言った。

「私が貴方を選んだのよ」

「社長…」

「私の目に狂いはないわ。そして現に私は貴方を今必要としている。

…そうでしょう？」

貴方が私を必要としてくれている。

私は貴方に必要とされている。

「はい…！」

まだ、私を必要としてくれる人が居る。

まだ、私の人生は、終わってない。むしろこれが新しい私の人生の始まりなのだ。

今日からここで坂久保の秘書として働く。仁美は今までにない新鮮な気持ちに包まれていた。

これから待ち構えまだ見ぬ世界を前にして……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9288n/>

I ~ 真実の瞳 ~

2010年11月12日20時19分発行